

## 原始佛教研究の道しるべ (二)

佐々木 現 順

外国文献の中で初心者にとって近づきやすいものについて若干述べるのであるが、初心者といっても外国文献を求める以上、かなりの基礎知識を持ち且つ語学への関心もかなり深い者ということになるから必ずしも初心者とは全くの素人という意味ではないであろう。かかる意味の初心者を対象とすることになる。

ところで、外国文献を取りあつかう場合、注意しておいた方がよいと思うことは第一に自分の興味がどこにあるかという点である。大分けて哲学思想にあるのか、文献研究にあるのかというぐらいの大まかな区分ぐらゐり予め考えておいた方がよからう。第二には、外国といつてもその佛教研究の歴史から言っても民族的要求からいってもそれぞれの国にそれぞれの相違があるから、その諸国家の大凡の性格をいくらか心得てから、その国から

出版されるものを見る必要がある。でないとかかなり自分の予想と相違したりして、失望をさせられないし、又、一方的主観的佛教観を他におしつけてしまう結果にもなりかねない。この二点を考慮に入れて先づ佛教研究を中心とした諸国家の方向をいくらか概略しておこう。

概してヨーロッパ特に英国は原始佛教の草分けであるが、その研究成果は専門的文献の方向をとっている。然し、最近は知識層に台頭した国際性という意味で一般的な著作も現われてきた。この一般化のためにとられていゝる技術、例えば、時代的区分による各思想の摘要集といった技術は多分にアメリカ的一般化の方法の影響でないかと思われる。ただし、そこでもなお文献の原理づけというヨーロッパの伝統が密着しているから、文献的諸資料を多く附加している。

アメリカは極めて限られた一部の専門学者による特殊問題の断片的研究という面とこれとは全く読者層を異にして、手取り早く思想だけ把えようとする現実的要求に応じた読者層を相手とした他の面との二つが見られる。

しかし、この二つの傾向を一つに結びつけるといふ段階にはまだ至っていないと考えられる。而も、専門研究という傾向はヨーロッパの傾向と変りはなく、ただ違っている傾向はそれと全く分離した思想の早急の把握という傾向である。この傾向に属するものが禅的介绍書或は視覚即ち美術を通しての佛教の紹介書などである。ただし、この傾向の書は独自の研究というものではなく既に日本に於て出版されたもの或は古くから熟知されていることの英語による紹介の程度にとどまっているから、そこから新しい専門的に啓発は必ずしも期待出来ない。このような状態だから、特に原始佛教研究といった特殊分野の研究は皆無に近い。しかし、文献的研究に忠実ではないけれども、思想として佛教を比較宗教研究の一翼としてとりあげているから佛教の世界宗教上の位置づけに関心を持つ者なら、このような出版界に注意しておくといふ。最後に、東南アジアからの出版物がある。主として近づいやすい英語ではセイロン出版が多い。セイロンは佛

教国であり、且つ西洋思想或は古来インド哲学の影響を殆んど受けていないという歴史的背景も手伝っていて、他思想との批判的交流は見出せない。まれに西洋人或は西洋的訓練を受けた佛教僧侶によって佛教の批判的著作もないではないが、これとても佛教的信念が表面に出ていて学理的裏づけに不足している面が多いので、その要求を持ってこれらを読むことはさしひかえたい。ではどういう態度であたるべきかという点、原始佛教の一部が単なる哲学としてではなく実践として日常生活の上で如何に具象化されているか或はどの部分が現代に至る永い歴史の間で信念として人間の精神状況の中で生き続けているかという点に興味を持つ者には極めて有益である。セイロンで学んで帰る欧米人でさえひとしく批判するところであるが、セイロンの現代佛教研究は無常・苦・無我の繰り返しにつきているといえる。私は無常・苦・無我の上に更に業思想の生きた実感もまた同様に反復されているといふことを追加しておく。

**基礎的辞書類** 原始佛教とインド思想との関係については文献も多いけれどもそれはそれだけでまた別個の論項になると思う。ただ Eliot の名著 *Hinduism and Buddhism* は依然としてよい参考書であるといふことだ

けを記して、あとは省略したい。今は比較的直接的に原始佛教特にその思想一般を知る上に初歩的に必要と思われるものだけにとどめよう。誰しも最初に知りたいと考えるのは思想的に言えば佛法の法とはどういうものだろうかということであろう。それには先づ Geiger, Pali Dhamma をあげねばなるまい。本書は佛教の中心概念たる法を分析し、主としてニカーヤをとりあつかうが勿論アビダルマという後期佛教も考慮している。少々散漫な点もあり且つ重複していると思われる分類法もまじっているが、ともかく体系的に法の義を網羅している点で今なお必読の書である。又、原始佛教研究に必要な文献として揃えておきたいものをあげると P T S の辞書、チルダースの Pali English Dictionary である。前者は最も需要が多いがニカーヤを主としたものであり、又、語源分解に多くの誤りと思われるものもあることを注意したい。チルダースの辞書は文献を多くあげているので併用することが望ましい。新しくアビダルマ文献をも追加し更に綿密に作られたつあるものは Danish Academy, A Critical Pali Dictionary であるが現在まだ a の項までしか出版されていないので遺憾である。研究上、単なる語意でなく、更に詳しい文献の引用を求めたいと

考える者には P T S, Pali Tipitakam Concordance が重要である。本書は一九五二年より一九六〇年までに三巻となって出ているがまだ patitihissati までで更に幾年が続くであろう。更に、既刊本及びマヌクリップトを広く眺めておいて自分の関心を何処に集中したらよいかを決める手ごころなものとしては、先に述べておいた A Critical Pali Dictionary の一部となつてゐる Epilegomena to Vol. I と同じく同書中の Vol. II, Fascicle I の両分冊であろう。

**文法書** 特に文法学を研究する者は別であるが一般的に原語で經典思想を理解するために修めんとする者には文法というものは簡明なものほどよい。これにはインド出版の文法書をすすめたい。インドでは学生の実修用としてどの国よりも永く深い生きた経験によつて手頃な文法書が出ているからである。たとえば C. V. Joshi, A Manual of Pali, Poona の如きもので充分間に合う。価格もインド出版のものは安い。ヨーロッパのものを好むならやはり少々専門的な整理がほどこされたものしかない。しかしその中でもヨーロッパ人の間では好評である手頃なものでは Mayrhofer, Handbuch der Pali I, II があるので、これ位を基礎として初学者は直ちに原

典について経験を積みむことが研究をすすめる効果的方法であろう。元来、生きた文法は經典読誦から自づと自らの手で自分のものとして整理して行くべきものである。文法よりも読むこと、話すことの方が先きであるという逆説が心がまえとしては必要であろう。生きた言語は文法の規則だけで出来たものではないからである。

**歴史** 宗教も思想も社会生活を離れて存するものではないから研究対象となる原始佛教時代及びその影響化の文化圏について概略を知っておくことが必要である。特に原始佛教の初期思想はどのようにでも解釈されうる要素を持っているものであるから、或る意味では時代を越えた主観的導入という危険をももたらす。独自の思想を持つためにも一度は客観的な思想の枠づけがなされねばならない。この意味で歴史或はクロノロジーの書も坐右におかねばなるまい。それには Adikaram, Early History of Buddhism in Ceylon があり、これは私が訪佛の時、フランスのドゥシエヴィーユ博士も推せんしていたもので著者はバリ在中に研究したものである。原始佛典そのもの及び註訳から引き出したセイロン佛教史であるから主観も入らず文献的根拠を持ち価値が高い。ヨーロッパ人の手になる佛教通史としてはベルギーの

Lamotte, Histoire du Bouddhisme Indien, Louvain  
が最もまごまった叙述を与えている。インド人のものでは B. C. Law, On the Chronicles of Ceylon, Calcutta.; Bode, Pali Literature in Burma; Malasakerā, Pali Literature in Ceylon などがあるが、これらは初学者のみならず、研究者にとつても屢々参照しなければならぬ重要な文献であるから求めておいた方がよいであろう。

**概論** インドに関する諸宗教は歴史と思想とを分離して考えられない。却つて歴史が即ち思想そのものであると思うべきであろう。佛教哲学の持つ能動性 (functionalism) はそれを歴史のうちで開いている。この意味で思想は思想史という形態で扱えられるのが常である。併し、かかる本格的研究を始める前に一応如何なる考え方が原始佛教でなされていたかということ或は如何なる問題が取り上げられていたかということを知りたいと思うであろう。そのために推したいのは Warren, Buddhism in Translation である。これは重要な問題 (業・無我等) を選びその原典を英訳したものである。文献的研究は本書の出版された時は未だ充分求められていなかったもので充分追加されてはいないが問題意識を我々に提起するものとして重要である。かかる問題意識を中心とした

ものに更に最近、文献及び歴史をも若干加えたものが新

しく出される傾向になった。これはヨーロッパ出版のものに多い。だから少々進めば E. Conze 編集の *Buddhist*

*Texts Through the Ages* などよい。又、一般的に思想

史・經典史・現代佛教・歴史等の如きものを知り、且つ海外の学者達の資料の取扱い方を伺うためには諸外者の

シンポジウムを読むことを推める。それにはインド政

府出版で *Bapat* 編になる *2500 Years of Buddhism* は最も入手し易く便利である。特にインド等諸国に伝来し

た佛教展開及び図録が附されているから初学者にとって有益である。本書は特に欧米人達の間で好評を重ねてい

る。是非参考書としてそばにおきたいものである。同じ総合的シンポジウムの形式で出ている老大なものに

*Bernal, Presence du Bouddhisme* がある。これは世界各国の学者が広汎にわたったトピックを論じたもので而

も美しい写真及び図表が多くのもせられているから見ていてもたのしい。ともかくこの種のもので今世紀最大の集

大成であるといわれるものである。必ずしも特殊研究に限られておらず古代から現代の問題まで及んでいる。パ

リーと Saigon のフランス学者らの手で主に作られたものであるが、日本でも代理店(紀ノ国屋、東京)で取扱

っているから入手困難ではない。

比較的まとまり而も一貫した主題を取りあつかっているものに Conze, *Buddhism* がある。これは原始佛教研究

者がとかく狭い特殊問題に陥入りがちな傾向にあるからそれを制禦する上で必要な概論書であるといえる。立場

は大乗であるが、原始佛教といえどもそこに至る方向を以て展開するのであるから最後のところをおさえておく

ことも大事である。H. Kern, *Manual of Indian Buddhism*; Hardy, *Manual of Buddhism* も追加してお

きたい。これなどは佛教学一般の入門書としても価値がある。

漸く進めば大小二乗についての区別という問題に誰でもつきあたるであろう。それに就ても先づ単なる主観的

感想に過ぎないような哲学者のものは研究者にとって意味はないと自覚して、専門家の手になる責任ある思想史

をたよりとしなければならない。この意味で N. Dutta, *Aspects of Mahayana Buddhism* は一役買いうる。勿

論、専門的な点で異論のある箇所も多いがともかくインドのものとしては珍らしく明白な時代区分の上で而も複雑な大小二乗の諸問題を提起してみせているから時代意

識を整理出来るのでよい。特に律(後述)に興味を持って

る初学者なら、その方面で研究が進んだとしても良い資料たることは確かである。

佛教といえどかく理論的なものが多いが特に我国ではそうした伝統がある。けれども国際的視野に立てば經典外の諸文献の研究が我国でもっと盛んになってよい。尤もそれには限度があると思われる。即ち、文献の入手困難、言語学の不充分さ等からして、ヨーロッパと立ち並べる段階に到るということは我国では難中至難である。

このことはインド言語学研究の分野についても言えよう。それと別個の方法論を以てすれば我国の思想研究という主流とむすび或はそれに一層新しい視野を与える可能性は充分存在する。特に近時、女子学生にして原始佛教研究に志す者も多く現われ出したが、これらの諸嬢は女性としての綿密さとその感覚を生かしてこの方面に進むのもよからう。即ち、佛伝研究・ジャータカ・アバダーナ等、或は単経として伝わるものの研究である。そのためには研究物よりも先づ身に感ずるという点で現物を読むということから始めてみたらどうであろうか。Honer, Ten Jataka Stories から始めて T. W. Rhys Davids, Buddhist Birth Stories に進み、あとは原文及びその諸訳に進めよう。W. W. Rockhill, Life of Buddha によつ

て佛教興起時代の背景を了解しておくのも良いが初学者には英文の研究にもなり、又、テクニカル・ターミノロジーに慣れるためにも必要である。ここには原始佛教々の基礎的英訳がなされてあるからである。

原始佛教の中心はやはり心理論であると考えるが、これをアルケ・タイプとして把えて永い佛教思想史の上で跡づけているものに Conze, Buddhist Thought in India があるが、本書は更に進んだ心理論の研究をリス・デーヴィズ(後述)の諸著書に就て見て行くための問題点を提起している意味で有益であろう。ドイツ語のもので古いものであるが今なお権威ある名著として H. Oldenberg, Buddha など適当である。

西洋哲学にも興味を持ちつつ、原始佛教を見たいと思う若い人々には Max Walleser の諸著書がよい。それらは凡て既に古い時代に属するから近頃は余り用いないようだが、内容は現代のものとは大差なく、更に多くの事柄は既に現在では熟知されたものが多くなったけれどもそれだけに内容にとらえられず語学の練習をかね更に思考方法を学ぶという点では是非熟読を願いたい。即ち Walleser, Wesen und Werden des Buddhismus; Die buddhistische Philosophie in ihrer geschichtlichen

Entwicklung: Die philosophische Grundlage des älteren Buddhismus などがあつた。

以上あげたこれらの欧米人になる概論書を読むにあつて注意したいことは、読者の方にいくらかの佛教の予備的知識を持つておくことであらう。歴史等の文化的背景は別としても、原始佛教々義について日本の著書や講義で少くとも二年位の訓練を経て大体言つてゐることの見当のつく程度の準備が必要である。これらの著者から学ぶことは教理の体系化或は文化史的背景といった諸点であるから教理そのものは既に知つておいた方がよい点も早くつかめ煩しくないからである。しかし、ただ読んで行く間でも無益ではなく、佛教の一字一句を簡結にとらえて行く把え方及び理解へ持つて行こうとする努力と現代的感覺を常に懐いてゐるといふ主体性を学ぶならば内容の各一は別としてそれだけでも今後専門研究に入つた場合、必ずどこかでそれに役立つことを信じたい。即ちいつまでも若さのみちた生々とした研究成果が永く続くであらう。これが外国文献をあつかう学徒をしていつまでも若さを保たせしめる大きな要因であると考えられる。佛教美術ということの一つここで附加しておきたい。というのは原始佛教は必ずしも書類の上でしか学問出来

ないものではない。それはわづかな学問の一部門に過ぎない。ところが現代はインドと欧米との交流も盛んになつたから一層視覚による研究が重んぜられることになつた。實際インド佛教美術は殆んど佛伝から出たモチーフであり、又、当時の風俗・習慣・西洋との關係が最も具体的に象徴せられてゐるのが原始佛教美術である。その点で将来インドに行く上にも必ずその一般的知識を広く持つべきである。ともかく、たのしいからである。學問も苦辛だけしかないなら學問の意味もない。たのしみながら學問するというのが宗教としての佛教研究の醍醐味ではなからうか。初学者は先づ原始佛教をたのしみながら研究したいという意欲を持つた方がよろしい。ところが我國では佛教美術というと教學とは別個と見られ、インド美術専門家のものには單なる写真集に過ぎないもの或は全く教理的理解が欠けているような作品が多く、そこでは思想的・佛伝の意味すらとり違へてゐるものさえ少なくない。この点、西洋の學者は更に深く立入つてゐる。それとても決して充分ではない。だから佛教教學をおさえておいて、美術によつて具体的な歴史を調べるといふのが新しい研究者の興味であらう。教理を心得たものとして、初歩的には先づインド政府出版の *The Way*

of the Buddha. があり、これは若干の原典も附加した美術書でインド政府自慢の編集であつて手頃であるから是非すすめた。 Marshall, The Monuments of Sanchi,

3 Vols は余り尅大であるなら同氏著の A Guide to Sanchi など便利であらう。少々説明を求めるならは Getty, The Gods of Northern Buddhism とか或はジャータカとの関係を知りたいならば Hargreaves, Buddha Story in Stone; Handbook to the Sculptures in the Peshawar Museum, Calcutta, 1930 など古書として入手出来れば求めておくとも。 Zimmer, The Art of Indian Asia, New York, 1955 など入手も困難でなく、且つ本書の著者はインド学者でもあるので、単なる美術家の写真集とは全く異つた理論付けがなされている。その他、単なる美術集というならば極めて多いが広く理論的ヒンドゥー美術論も時折眺めてそれを背景として生れた佛教美術を自らの佛教学と比較しつつ、自らの美術論を考へておくこともたのしい方法であらう。

経 経理論三蔵の経典史的地位と相互関係の概略は上記の項目(歴史)のところであつてある殆んどの入門書にも言われているから、その方を再度参照されることが望まれる。ここで経に関するものといへばその思想を簡

単に知つておこうとする希望の初学者にすすめられるものだけにとどめよう。

少々古いものであるが、オーソドックスとして見てもよいものに I. Sadaw, Thoughts on Buddhist Doctrine, JPTS, 1913-14 がある。主としてニカーヤによるものであるから一番手取り早い。元来、Pali Text Society のジャーナルにおさめられているものは一般的問題に限らないけれども大体、初学者にとつても理解され易い問題についての諸論項をふくんでいるから案外、こうした一見余りに専門的印象を与えるこのシリーズの中に良き道しるべを見出すであらう。原始佛教を心がける者の一つの方法として、かかるわかり易い特殊問題を眺めて、そこから問題を自分で展開して行くという方法論もある。その方が身についた体系を作る訓練にもなるかと思う。或は経は元来、繰り返しの多いものであるし、思想や教義も複雑ではないから大事な経をそのまま欧訳でよんでみるの方が単なる紹介本よりも直接利益がある。決して困難な教義の予備知識を要求するものではなく、気軽によみうる。それには漢訳阿含など一見近付き難いだろうし、和訳もかえつて困難な中日混合の文字が多いのですすめられない。むしろ欧訳がよい。例えば、R.O.



Frankle, Dighanikaya, das Buch der Langen Texte des buddhistischen Kanons などそれにふさわしく而もこれは抜粋だから退屈しない。やや哲学的にニカーヤ思想をまとめたもので解り易い著は Keith, Buddhist Philosophy in India and Ceylon であつて、これは我国でも先人達がバイブルのように熟読したものであつて今なお古びたものとはなっていない。佛伝の基礎的研究でもあるが原始思想を適格にサンマライズしながら佛陀を浮きぼりにしたものとして C. A. Rhys Davids, Gotama the Man がある。更に同氏のものに A Manual of Buddhism for Advanced Students もある。書名には advanced students と書いてあるが我国の如き佛敎国の生徒から見れば初学者でも充分利用出来るであらう。ニカーヤだけでは狭いと思う者には E. J. Thomas (introduction), Buddhist Scriptures が向くであらう。これは Selection づかかなり古く London: John Murray, 1913 の出版であるが、パーリ原典からの引用文である。同じ趣向で譬喩を集めたものに E. W. Burlingame, Buddhist Parables, New Haven: Yale University Press, 1922 がある。これは歴史の項で述べたようにジャータかなどに興味を持っている者には必携の書である。

原始佛敎時代の敎団について興味を持てる者は後に律の項下であげる著書を導きとすることが望ましいが、敎団に限らず、前からあげて来たような経の思想的觀察という角度から敎団の形成された姿をも眺めてみたいと考えるならば——教義と敎団との關係——を中心にした次のものが適當であらう。H. Oldenberg, Buddha-sein Leben, seine Lehre, seine Gemeinde, Stuttgart u. Berlin である。これは一九二三年の出版でかなり古いが名著として今なお初学者に進められる。新しい作品ではこのような一般的入門書的なものは極めてすくない。たとえ敎団史はあつても、何かのイデオロギーのもとで書かれたものか或は社会学的見地で書かれたものでしかなく、文献の基礎に於て信頼の度がうすいと考える。もしかかる出版物をよむならば、その前に専門学者が入門書的に書いたものの方を先に見ておくという注意が必要であらう。現代に於ては前記 (Oldenberg, Buddha) の如き総括的なものはすくない。といつて今しがた述べたような社会学的イデオロギーで取上げたものもすすめられない。そこで現代に於て求められるものは総括的な単なる外面的「説明」書ではなく、内容的に原典そのものの「適要」書であらう。この方がイデオロギーで主観さ

れた単なる「読みもの」よりは一層有益であることは言をまたない。

この線にそったものとして L. W. Faneett, *Seeking Gotama Buddha in his Teachings* 及び同氏の *Spiritual Evolution in India* とである。後者はクロノロジーと紀元前五世紀頃のインド思想の佛教への影響と新バラモン主義に關したもので両者とも写真も入った原典からの抜粋である。残念なことはこの両書は一般的に入手出来ないだろうとおされる。然るにわざわざそれをここであげた理由は次のことである。即ちわかり易い原典の抜粋によって古時代を浮きぼりし且つ現代的な諸問題(政治・道徳・宗教・哲学)をかかげ、それに答える原典の箇所を詳しく上げているからである。よく理念が整理せられている著書である。入手し難いものではあるが、新しい感覚を持った問題に対して、古い原典そのものをして語らしめているという新旧両者のコンビネーションは我々の学ぶべきところであらうと思う。何故なれば、ややともすると初学者は新しいけれども主観的感情輸入に走り、原典をおろそかにするという傾向を持つのが常であるからである。

初学者には諸文献特に一般的なものを好み、断片的知

識でも困難なく覚えてしまおうという記憶型の者とか、或は眼で見ながら理解するという直感型の者も多いと思う。この二種の型の学徒のためには以上あげた諸文献が役に立つだろうと思う。然るに最後にもう一つの型が考えられる。それは思索型である。大体日本の歐語教育は言語でなく、それを手段として思想だけつかもうとする教育である(これはもう古い教育法であるが)から、そこで訓練された者はともかく内面的思索型の学生を作る傾向になる。特にドイツ語教育などこうした一方的教育になやまされている。ともかく、やや特殊問題を少々突込んで見てそれを中心にして大体の概論的理解をうるといいうり方も考えられる。こうした者のために F. Heiler, *Die buddhistische Versenkung*, 1922 とか H. von Glasenapp, *Die Weisheit des Buddha*, 1946 など気に入るだろう。但し、二著者は佛教専門学者ではないので例によって既成事実或は常識として知られている佛教をもとにした哲学的作品であるからその点、心得ておくべきで、その所論をそのまま広げて行くことは出来ない。有名哲学者であるが、この限りただ教養として見ればよい。

同じ思索型の人でも佛教的に又、哲学的にと念じて理

解を求める者は少し本質的なものをみて——少々困難でも——じっくり考えて行った方が一層効果的でないかと思う。それには佛教の根本思想たる「法」とは何かという一般的且つ本質的問題を初歩の段階で先ず考え始めてもよいと思う。そのためには是非推したいのはH. Von Glasenapp, Zur Geschichte der buddhistischen Dharma-Theorie, ZDMG 92, 1938, S. 383-420; 同し、Der Ursprung der buddhistischen Dharma-Theorie, WZKM 46, 1939, S. 242-266 なる二篇の論文である。これは

既述の Garbe 著 Pali Dhamma と違って思想的体系的なもので広い視野を持つ著者の佛教専門分野に関する逸品であると思われる。ドイツの哲学者はさすがと思

われる。身边に見られるようなジャーナリストや哲学者の佛教談義といったものとまるで違っている。こういう学究的反省もまた外国文献から学ぶべき大切なことであろう。

以上述べたことは極めて概括的なものであるのみならず、初学者の興味をつくしたものではない。けれども古来誰にでも目を通されていた古いが而も今なお生きていゝる上記の諸著書をもう一度襟を正して読むことによつて、却つて自らの中に新しい時代に処する ein lebendiges Bild を懐くことが出来るであらうかとも希う。

(二九七〇・九・二〇)